

淑徳女学校設立趣意書の 「淑徳」についての考察

米 村 美 奈^{*}

要旨

淑徳大学の母体である学校法人大乗淑徳学園は、女子教育の先駆者である輪島聞声が創設した「淑徳女学校」と、長谷川良信が創設した「大乘女子学園」との合併によって設立された歴史的経緯がある。合併後、建学の精神の象徴である校名は、淑徳女学校の「淑徳」と命名された。創立者が校名に込める建学の精神は、教育機関にとって教育目標にもなる重要なものである。建学の精神をより深く理解することは、教育目標を確認することになる。本稿では、校名の「淑徳」がどのようにして採用されるに至ったのか、また、「淑徳」の教育に込められた意味を明らかにすることを目指す。

キーワード 淑徳、女子教育、淑徳女学校、設立趣意書、輪島聞声

I. 研究目的

1. 研究目的

本稿の研究目的は、淑徳女学校設立趣意書の「淑徳」、および淑徳女学校の開校時（1892年、明治25）の校名「淑徳」についての考察である。

筆者は淑徳大学自校教育推進委員会の一員として、『淑徳学入門』（2018年）、『淑徳大学自校教育ガイドブック』（2019年）の検討・分担執筆・編集に参加し、同じ時期に『輪島聞声の生涯』（2019年）を執筆する機会が与えられた。これらの出版を通して、淑徳大学の建学の精神への理解を深めると共に、「校名の淑徳はどこから来たのだろうか」という素朴な、そして根源的な疑問を抱き続けてきた。

全ての私立大学は建学の精神に基づき、教育活動や研究が進められている。建学の精神には、創立者の明確な教育目的や育成すべき人間像など、熱い願いや想いが込められている。

^{*}総合福祉学部 教授

それは、校名にもまた反映されている。建学の精神を深く理解することでそこで行う教育や研究は、よりその目的が明確化する。さらに校名への理解を深めることでそこに込められた建学の精神の意味を知り、教育や研究のゆるぎない根幹を認知することができる。

2. 淑徳大学（学校法人大乗淑徳学園）の二つのルーツと、「学校名」の由来

淑徳大学（学校法人大乗淑徳学園）には、建学の精神にかかわる二つのルーツがある。一つは、今から128年前の1892年（明治25）に、女子教育の先駆者・輪島聞声^{わじまもんじょう}（1852～1920。以下、聞声とする）によって創設された「淑徳女学校」である。教育目的は「淑徳」「静淑の徳」^{ようちよう}「窈窕たる淑徳を養成する」であり、聞声の信条は「進みゆく世におくれるな。有為^{ゆうい}な人間になれよ」であった。文明開化に伴う変化の激しい明治時代に、既成概念や先例にとらわれず、女性が社会や人のために生きることを理念とし、その信念を強く貫き通した。

二つ目のルーツは、淑徳女学校の開校から27年後の1919年（大正8）に、黎明期日本社会事業の先駆者・長谷川良信（1890～1966。以下、良信とする）^{りんぼ}1) が、隣保事業（セツルメント）の実施のために創設したマハヤナ学園であり、同じく良信が1924年（大正13）にマハヤナ学園内に創設した「大乘女子学園」である。良信は著書『社会事業とは何ぞや』（1924年刊）で、社会福祉の実践に対する信念として「Together with him トウギャザーウィズヒム（彼と共に）」を示した。この大乘仏教の教えに基づく理念は、福祉分野の援助者だけに向けられたものではなく、人が人と共に生きるうえでの指針であり、建学の精神である。

二つのルーツは1949年（昭和24）に合併し、学校教育法の改正に基づき、1951年（昭和26）に学校法人大乗淑徳学園となり、聞声の「淑徳精神」と良信の「大乘精神」が合流し融合したのである。

次に校名をみると、マハヤナ学園は良信の生涯の恩師・渡辺海旭^{わたなべかいぎょく}が「大きな乗物（大乘）」を意味する、古代インドのサンスクリット語「mahā yāna マハーヤーナ」から命名したことは良く知られている。²⁾そして大乘女子学園の「大乘」はマハーヤーナを翻訳したもので、両校とも大乘仏教の菩薩道の実践に基づく校名であり、良信の建学の精神を象徴している。

一方、淑徳女学校の校名は、創立者の聞声が浄土宗宗務所学監宛に提出した「淑徳女学校設立趣意書」に基づく校名とされている。しかし、どのような経緯で「淑徳」と命名されたのか定かではなく、先行研究においても踏み込んだ論究が見当たらない。

本稿では、最初に淑徳女学校開校時の校名が「淑徳」と決まった経緯とその言葉の由来を考察する。

II. 倫理的配慮

本稿は、筆者が所属する一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。

史料の取り扱いについては、プライバシーや人権を配慮し、現存する組織等の不利益にならないよう倫理的配慮を行っている。また、史料等の引用方法や記載も淑徳大学研究紀要投稿規程に沿って行っている。

Ⅲ. 「淑徳女学校設立趣意書」の検討

1. 「淑徳女学校」の校名の初出と経過

聞声は出生地の北海道松前で、12歳から漢学者^{さいとうたつおき}斎藤龍興の漢学塾に通い、四書五経などの漢籍^{かんせき}を深く学んだ。次に仏教の師・和田^{きもん}瑤門に出会って仏教の經典類を学び、出家を決意した。松前の弁財天^{せいがん}に誓願を立てて上京し、浄土宗の高僧・福田^{ぎょうかい}行誠のもとで出家得度して尼僧となり、京都で厳しい修行に打ち込んだ経歴を持つ。明治の新時代にふさわしい新たな尼僧教育を実施するため、1888年（明治21）に総本山知恩院内に学びの場としての尼衆教場を開設した。尼僧の意識改革と地位向上を目指したものである。尼衆教場は曲折を経て1912年（明治45）に尼衆学校となり、長谷川よし子も学んでいる。³⁾

聞声は、悲願の尼衆教場を開設した半年後に、宗門より東京本所の^{かんのういん}感應院の復興を命じられて上京し、増上寺内に設立された東京尼衆教場の監督兼教授となる。その後、女性が教育を受けることが一般的でなかった時代に、女子教育の必要性を痛感し、使命に燃えて、1892年（明治25）に一般女性を対象とする淑徳女学校を開校したのである。

では、聞声はいつ、どの段階で「淑徳女学校」と命名したのだろうか。

淑徳女学校は1945年（昭和20）5月25日、アメリカ空軍のB29による東京大空襲で校舎を全焼し、開校以来の関係資料を焼失している。聞声自身も著述をほとんど残していない。わずかに、入寂直前の聞声から聞き書きし、入寂2ヵ月後に発行した谷紀三郎編『聞声尼』⁴⁾や、同時代資料の『浄土教報』⁵⁾などが聞声の活躍を伝えている。そうした数少ない現存資料をもとに、校名の命名時期について時系列を追って整理すると、以下の通りとなる。

- (1) 谷紀三郎編『聞声尼』は、聞声が1891年（明治24）9月17日付で「普通女学校の設立願」を浄土宗宗務所學監宛に提出したと記している（谷 1920：89）。しかしその「設立願」の文面は掲載されていない。「普通女学校」の意味は聞声がそれまでに開設した尼僧の学びの場としての尼衆教場ではなく、一般女子を対象とした女学校のことである。
- (2) 「普通女学校の設立願」に対して、ほどなく浄土宗宗務所から許可が下りたとされ、聞声は翌1892年（明治25）2月、伝通院協の真珠院を訪問して茅根^{ちね}学順^{がくじゅん}と野沢^{のざわ}俊岡^{しゅんけい}に普通女学校設立について相談をしている（谷 1920：91）。
- (3) 2月15日発行の『浄土教報』第99号（1892年、明治25.2.15）の社説に、「女子教化の急要を論ず」が掲載された。内容は「普通女学校の設立願」を下敷きにした論旨

である。

- (4) 2月17日、真珠院に茅根学順、野沢俊岡、三星善応、竹川弁中、金子常全、竹田典栄、広安真髓、蓮池恒次、和久正辰等、浄土宗の枢要な人々が集まり、聞声提案の普通女学校建設への賛同、敷地を伝通院境内に借り受けることなどが決められた(谷 1920: 92)。しかし、『聞声尼』に校名を協議した記載はない。
- (5) すぐに、伝通院境内を借り受ける交渉が行われた様子で、「地所貸渡願」が東京都公文書館および増上寺に所蔵されている。いずれも伝通院境内地を「輪島聞声女学校設立ノ敷地トシテ」5年間貸借することが明記されているが、学校名は記入されていない。
- (6) 聞声の女学校設立に関する報道は、『浄土教報』にたびたび掲載されている。確認できた初出記事は第101号（1892年、明治25. 3. 5）である。「輪島聞声尼の計画」の見出しで、「東京尼衆教場の教頭輪島聞声尼はかねて女学振起の志願ありしが、いよいよ地を小石川伝通院境内に^{ぼく}とし……」と報じているが、学校名は記入されていない。
- (7) 『浄土教報』第106号（1892年、明治25. 4. 25）に、「静淑女学校創立」の見出しと記事があり、これは近來の美挙であり、このたび「創立^{ママ}旨趣書」を入手したので掲載する、として「静淑女学校創立並びに建築諸言」が全文掲載され、4月15日の日付と発起人の名前が輪島聞声尼と明記されている。これが校名の初出と考えられる。しかし名称は「静淑女学校」であり、「淑徳女学校」ではない。
- (8) 2ヵ月後の『浄土教報』第111号（1892年、明治25. 6. 25）に、初めて「淑徳女学校の創立」の見出しで、淑徳女学校の校名が掲載される。
記事は「輪島聞声尼その他有志者の首唱にかかわる同校は、(略) いよいよ9月より授業に着手する都合となれり。これがため、去る11日に伝通院において、学科編纂等の相談会あり」と、設立関係者の相談会の開催を報じている。さらに「淑徳女学校」の教育目的を、「同校は読書・算術・手芸・修身・図画・生花・点茶等の教科を教授し、女子の淑徳を養成する目的なり」と明記している。
- (9) 初めて「淑徳女学校」の見出しが掲載された1ヵ月後、『浄土教報』第115号（1892年、明治25. 7. 25）に、「静淑女学校設立に^{かん}干し」と題する長文の投稿文が掲載された。注目すべきは校名が、「淑徳」ではなく「静淑」であり、寄稿者は三池勇善である。

内容は聞声の「静淑女学校」の設立に賛同すると共に、校名の「静淑」にふさわしい徳育重視の教育を要望すると述べている。(7)の『浄土教報』第106号（1892年、明治25. 4. 25）の「静淑女学校創立並びに建築諸言」を読んだの寄稿と考えられる。あるいは推測であるが、寄稿者の三池勇善も『浄土教報』の記者と同じく、聞声た

ちが告知と勧募のために印刷し、配布した「静淑女学校創立並びに建築諸言」を入手していたのではないであろうか。

- (10) 1892年（明治25年9月7日）、「淑徳女学校」が開校した。まちがいなく、学校名は「淑徳女学校」である。

以上のように、淑徳女学校の開校までの約1年間にわたる関係資料を時系列に沿って整理した結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 1892年（明治25）3月5日の段階、すなわち、(1)から(6)までの時点では、校名が表示されていない。
- 2) 4月15日に、(7)の「静淑女学校創立並びに建築諸言」が作成されて、静淑女学校の名が公表された。記者が「静淑女学校創立並びに建築諸言」を入手し、10日後の『浄土教報』第106号に掲載した。
- 3) (8)の『浄土教報』第111号の記事を見ると、相談会に「三星（善応）本校長、和久（正辰）同教頭、桑田衡平、布施仲男、茅根学順、金子常全、武田（竹田）典栄、越岡（野沢）俊岡等の諸氏も出席し、種々の協議が行われた」とされ、当然ながら提唱者の聞声も出席していたものと想定される記述である。注目すべきは出席者の多くが2月17日の真珠院の会合に出席した人々である。おそらくそれまでにも、聞声や茅根学順、野沢俊岡を中心に、校名や教育理念や学科内容など、さまざまな協議が続けられたものと推測できる。
- 4) 6月11日の伝通院での相談会までに「淑徳女学校」の校名が決定したと考えられる。遅くとも、相談会の席上で決まったと推定できる。

では、なぜ4月15日作成の「静淑女学校創立並びに建築諸言」で、校名を「静淑」と公表しながら、その後「淑徳」と改定したのであろうか。さまざまな角度から検討する。

2. 「淑徳女学校設立趣意書」の表題の問題点

ここで本稿にとって重要資料である「淑徳女学校設立趣意書」の表題の問題点について検討する。前述のように、聞声が1891年（明治24）9月17日付で、浄土宗宗務所学監宛に提出した文書を、谷紀三郎編『聞声尼』では「普通女学校の設立願」としている。注4)に詳述したように、『聞声尼』は著者の谷が病床の聞声から聞き書きし、聞声の弟子・平松誠厚^{ひらまつ せいこう}や姪^{めい}の松田すて子が収集した関係資料をもとに執筆したものである。推測ではあるが、9月17日と日付が明記されている点からみて、収集資料の中に「普通女学校の設立願」の写しがあったか、聞き書きで聞声から表題と提出日を聞いた可能性が極めて高いと考えられる。なお「普通女学校の設立願」の原本および複写の存在は、確認されておらず筆者も未見である。

さらに、聞声は浄土宗の尼僧で感応寺の住職であったので、一般女子を対象とする女学校の設立には浄土宗の公式の許可が必要と考え、提出したものであろう。その意味で言えば、あくまでも一般女子のための普通女学校を設立したいという「願書^{ねがひしょ}」である。当時、普通学校の設立は時代の要請として大きく盛り上がり、聞声も一般女子の普通教育の必要性を痛感して、1888年（明治21）に「奨学建議書」を浄土宗議会に提出している。⁶⁾

したがって、「普通女学校の設立願」は浄土宗当局を説得するために、女子教育に対する現状認識、問題点の指摘、仏教の教えに基づく女学校開設の必要性、理想とする女学校の教育目的などが強調されたものといえよう。そうであれば、文中に校名が表記されていないのは当然である。宗門から設立が認められた後に、初めて校名や教育科目などが具体的に検討され、決定されていくのが通常の手順だからである。

前述したように谷紀三郎編『聞声尼』にも「普通女学校の設立願」は未収載で、それと思われる文書を記載するもっとも古い資料は、開校4ヵ月後の『浄土教報』第131号（1893年、明治26.1.5）である。「淑徳女学校の始業」の見出しで生徒数の増加を伝え、「同校の規則要領を掲ぐ」として「凡そ徳性の薰陶は躬自^{およ}行^{くんとう}うて^{みずか}…」で始まる全文を掲載している。申請者の名前はない。

谷が9月17日に浄土宗宗務所學監宛に提出したと記しながら、文書を掲載していない「普通女学校の設立願」と、『浄土教報』第131号が報じた「同校の規則要領」が同一のものであるか否か、確かめる方法は見当たらない。

ではいつから「同校の規則要領」が「普通女学校の設立願」であり、さらに「淑徳女学校設立趣意書」とされるようになったのだろうか。筆者がこれまでに閲覧できた資料によれば、1942年（昭和17）発行の広瀬了義編『淑徳五十年史』からである。広瀬は同書で「我校は左の如き設立趣意書を発表している」と記し、「同校の規則要領」の全文を掲載している（広瀬 1942：22）。

『淑徳五十年史』は戦前の豊富な関係資料を参照して編集されている。さらに編者の広瀬自身が1920年（大正9）に淑徳高等女学校に奉職し、雑誌『淑徳』で健筆をふるい、淑徳女学校の生き字引的存在であった。⁷⁾ その意味で『淑徳五十年史』は、その後の淑徳女学校および聞声研究の重要資料となった。そのために広瀬の表題変更の影響は大きく、以降の先行研究や淑徳女学校関係の学校史では、ごく普通に「淑徳女学校設立趣意書」の表題が用いられている。同時に、あたかも「淑徳」の学校名が当初から決められていた印象と、そうした前提に立っての研究が重ねられてきたと言える。筆者もまた前著『輪島聞声の生涯』で、「これは願書である」と注記しながらも「淑徳女学校設立趣意書」の表題を踏襲してきた。

3. 二つの「淑徳女学校設立趣意書」

聞声が1891年（明治24）9月に提出した、いわゆる「淑徳女学校設立趣意書」が浄土宗当局に対する「普通女学校の設立願」であったという原点に立つとき、その特異性がよりよく理解できる。たとえば『淑徳教育七十年』の編者・徳武真有が、他校の設立趣意書に比べて、

「『凡そ徳性の薫陶は躬自ら行^{およ}うて而^{くんとう}して後^{みづか}、人を導くにあらずんば得て望むべからず……』という格調高き文章は淑徳女学校設立趣意書の冒頭の一句であるが、ここには教育上のスローガンもなければ、生徒の現実とかけはなれた無縁な徳目や、空虚な綱領をならべて、これをおしつけるというような意図は毫^こも（筆者注・少しも）ない。生徒への要求は何も示されず、ただ教師の模範的実践が強調されているのみである」（徳武真有 1962：14）と指摘している点である。

徳武も「普通女学校の設立願」を「淑徳女学校設立趣意書」と読み込んだの論評であることは言うまでもない。

次に、「普通女学校の設立願」という原点に立つと、「静淑女学校創立並びに建築諸言」の持つ役割を再検討する必要性が増してくる。なぜなら「静淑女学校創立並びに建築諸言」こそ、浄土宗から公式の許可を得たのちに、茅根学順や野沢俊岡などの賛同者と相談の上で、女学校創立の決意表明の告知と、広く浄土宗内外からの浄財を勧募するために印刷し、配布した「設立趣意書」と考えられるからである。

また、『浄土教報』を詳細に調査すると、第131号（明治26.1.5）で淑徳女学校の開校を大々的に取り上げ、聞声と淑徳女学校の顕彰に頁を大きく割いているのにもかかわらず、わずか10日後の次号（第132号・明治26.1.15.）で、「静淑女学校始業」の記事を掲載していることに違和感がある。おそらく『浄土教報』の記者の手に、入手した「静淑女学校創立並びに建築諸言」が保管されており、その「静淑女学校創立」の表記に影響されたものと想像される。

では、「淑徳女学校設立趣意書」と「静淑女学校創立並びに建築諸言」を比較すると、どのような違いがあるのだろうか。両者の書式上の違いは、前者に提出者の氏名がなく、後者に発起人の氏名が明記されている。内容面では徳育教育を強調するなど、論調に重なる部分が多いが、後者では女子教育の現状を鋭く分析して、徳育の緊急性を強調し、「^{ようちやう}窈窕たる淑徳を養成すること」を目標に掲げるなど、前者よりも一歩踏み込んだ、設立趣意書らしい表現が多く見られる。

その一つは付記の「女学校設立成功の上は浄土宗公有の校舎とす」という一文である。^{いちぶん}そこには発起人・聞声の並々ならぬ決意と覚悟が示されている。女学校が成功した暁には浄土宗の校舎とするという文言には、設立に賛同し支援してくれる人々に対しての責務と、仏教

者・聞声の女子教育に対する真摯^{しんし}な姿勢が読み取れるからである。

同時期の仏教系女学校の設立趣意書と見比べると、筆者は、「淑徳女学校設立趣意書」と「静淑女学校創立並びに建築諸言」が相互補強する内容であることに気づく。そして二つを合わせることで、創立者聞声の建学の精神がより鮮明に浮かび上がってくることがわかる。

以上の考察を踏まえ、本稿のこれ以降の記述では、「淑徳女学校設立趣意書（普通女学校の設立願）」を「淑徳女学校設立趣意書A」（以下、設立趣意書Aとする）とし、「静淑女学校創立並びに建築諸言」を「淑徳女学校設立趣意書B」（以下、設立趣意書Bとする）と表記する。

4. 二つの「淑徳設立趣意書」

設立趣意書Aでは、最初に「生徒の徳性（道德心）を育てるには、自ら率先して模範を示し、そののちに導くのでなければ、良い成果を得られない（道理である）」と指摘し、続けて「現在、女学校と称するものが多数設立されている。その（教育）目的は、皆、淑徳をかがけているが、往々にして目的と反対の教育結果が多いのはどうしてであろうか」と疑問を呈している点に注目する。そして、異教徒（キリスト教）による女子教育の現状と問題点を取り上げ、「女学校を設立し女子の『淑徳の徳性』を養成して、立派な教育の効果をあげたいと願うものである」と述べ、その方法として、「徳を身につけた教員を招き、教科書および学校運営の方法を充分吟味して、（女子生徒たちの）静淑の徳（道德心）を養成する上で問題が起きないように努力する（覚悟である）」としている。

次に、設立趣意書Bでは、明治維新以来の文明開化の風潮のなかで、「世間の女子学校（の教師）は、たいていキリスト教の薫陶を受けた者が多い」と指摘し、そうしたキリスト教の薫陶を受けた教師による学校教育が知育偏重となり、徳育がおろそかになっている傾向に警鐘を鳴らしている。具体的には、日本に根付いてきた道德規範ともいべき親子の恩愛の情が断絶されようとしている、と慨嘆している。そして、こうした弊害を矯正するために、伝通院内に静淑女学校を設立して、女子教育の方針を定め、窈窕^{ようちょう}たる淑徳を養成する必要があるとしている。

設立趣意書Bに登場する窈窕の出典は、四書五経の一つの『詩経』（周南・関雎）の「たおやかで美しい女性は、君子の良き伴侶となる（窈窕淑女、君子好逑^{こうきゅう}）」である。「好逑^{こうきゅう}」は良きつれあい、伴侶の意である。ここから「窈窕^{ようちょう}」が、たおやかで奥ゆかしい女性のしとやかさや、美しさを形容する言葉となったのである。

設立趣意書AとBに共通して示されているのは、以下の象徴的な表現の3点である。

- (1) 「女子の淑徳の徳性を養成して、立派な教育の効果をあげたい」
- (2) 「徳を身につけた教員を招き……（女子生徒たちの）静淑の徳（道德心）を養成する」

(3) 「^{ようちよう}窈窕たる淑徳を養成する」

3点の中核にあるのは「淑徳」「静淑の徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳を養成」である。いずれも、聞声にとっての女学校教育の基本理念を表す表現である。

では、聞声にとっての「淑徳」「静淑の徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳を養成」とは、どのようなものであろうか。それを解くカギを、筆者は設立趣意書Aの「現在、女学校と称するものが多数設立されている。その（教育）目的は、皆、淑徳をかかげているが、往々にして目的と反対の教育結果が多いのはどうしてであろうか」という疑問に含まれていると考える。

IV. 「淑徳」をかかげる女学校

1. 聞声の疑問と、仏教系女学校の系譜

前項の聞声の疑問を整理すると、聞声が設立趣意書Aを起草し、浄土宗宗務所學監宛に提出した1891年（明治24）9月17日時点での状況は以下に整理できる。

(1) 教育目的に「淑徳」「静淑の徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳の養成」などをかかげる女学校が、複数校存在していた。

(2) しかし、いずれの女学校も、教育目的にかかげた「淑徳」「静淑の徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳の養成」を達成できていない。

(3) むしろ、教育目的と反対の教育結果が多い。

それでは、教育目的に「淑徳」「静淑の徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳の養成」などをかかげた仏教系女学校とは、具体的にはどの女学校であったのだろうか。

明治の仏教系女子教育に関する先行研究には、斎藤昭俊『近代仏教教育史』、中西直樹『日本近代の仏教女子教育』、芹川博通『国家・教育と仏教』、久木幸男編『仏教教育の展開』などの優れた業績が積み上げられている。これらの研究成果に導かれながら、明治の仏教系女学校の系譜を概観し、淑徳を教育目的にかかげる仏教系女学校を確認して考察する。

仏教者による最初の女学校は、1886年（明治19）に山口県徳山市の徳応寺（真宗本願寺派）に設置された「^{とくやま}徳山婦人講習会」と、鳥根県松江市の活版印刷業者で本願寺の熱心な信徒であった石原光璋によって始められた「^{さんしゅう}三州学校女子部」とされる（中西 2000：25）。設置当初の徳山婦人講習会は2年の就業年限で、学科も修身のみである。三州学校女子部も官立学校・^{かんし}官仕（官途・役人になること）の受験者を対象に開設された学校であり、共に「淑徳」などの用語を教育目標にかかげていない。

翌1887年（明治20）に、^{じゅんしゅう}順承女学校、オリエンタルホール女子部、^{せいよう}清揚女学校、^{せんがん}仙巖学園、^{しんなん}親和女学校等が設置・開校された（中西 2000：27～28）。このうちの清揚女学校の校内に、1888年（明治21）に設立されたのが「上毛婦人教育会」である。規則第2条に、「本会は婦女に必要な^{こうきゅう}学芸を^{ひんそう}攻究し淑徳品操を養成するを^{もつ}以て目的とす」と、「淑徳品操を養成」

が明記されている。聞声のいう「淑徳」「静淑の徳」「窈窕たる淑徳の養成^{ようちょう}」について、筆者が確認できた最も早い用例である。次に清揚女学校および上毛婦人教育会について考察する。

2. 「清揚女学校・上毛婦人教育会」の「淑徳」

清揚女学校^{せいよう}は1887年（明治20）9月、群馬県前橋市の真宗本願寺派の説教所に設置された女学校である。中心となったのは当時、北関東を拠点に布教活動を活発に行っていた小野島行薫^{ぎょうくん}であり、前年の1886年（明治19）に芦沢鳴尾（元群馬県立女学校取締）を校主として、群馬県に設置伺を出している。設立趣旨は、我が国の女子教育の遅れを憂い、英語を主として和漢の文学を修め、女子に適応する技芸を授けるという内容で、「淑徳」「静淑の徳」「窈窕^{ようちょう}たる淑徳の養成」などの表記を見出すことはできない。

しかし、小田島は清揚女学校を開設した半年後の1888年（明治21）に、地元の名流夫人を集めて、清揚女学校の校内に上毛婦人教育会を発足させている。同年に、しかも同じ前橋市に、キリスト教に基づく前橋英和女学校が設立されたことに対抗したものと考えられる。

上毛婦人教育会は清揚女学校内に本部を置き、『婦人教育雑誌』を同年5月1日に創刊している。創刊号の巻頭社説で小田島は、「西洋文明の思想がひとたび我が国に入ってきてから、まだ歳月もたたないうちに、百事万物がその面目を改め」（現代語訳）と述べ、そのなかでも「最も近き時に起こり、最も世人の注意^{ちゅうい}を喚び、最も必要にして、重大なものは女子教育そのものである」と指摘し、「婉婉貞淑^{えんめんていしゆく}の日本女子を養成」すべきとしている。そして巻末に「上毛婦人教育会規則」（第1条～第20条）を掲載し、前述の「第2条 本会は婦女に必要なる学芸を攻究^{こうきゅう}し淑徳品操^{ひんそう}を養成するを以て目的とす」が示されている（『婦人教育雑誌』第1号、61～63頁）。

さらに、同誌には島地黙雷が「能く日本人の細君^うとなり得るや否や^{いな}」を寄稿している（『婦人教育雑誌』第1号、16～20頁）。島地は「およそ男子は必ず配偶者に淑女を得んことを望み、淑女も配偶者に才子を得んことを望む」と書き始め、同年4月3日に雑誌『日本人』を発刊したことを述べ、雑誌は一男児の誕生に等しいとして、この一男児にふさわしい「日本婦人すなわち清淑^{せいしゆく}窈窕^{ようちょう}婉婉^{えんめん}貞従^{ていじゅう}の佳人^{いちかじん}」を求めると記している。そのほかにも「窈窕清淑^{ようちょうせいしゆく}の日本婦人」や「婉婉貞従^{えんめんていじゅう}の淑徳」などの表現が見られる。前述したように「窈窕」とは「たおやかで奥ゆかしいさま」を意味し、「清淑」「婉婉」「貞従」「佳人」もみな、女性のしとかさや、清らかさを形容した熟語である。

島地は同年（1888年、明治21）に、東京の上流婦人に呼びかけて「令女教会」を発足させていた。そのためもあり、文中で小田島を「莫逆^{ばくげき}の友（意気投合して極めて親しい間柄）」と呼び、小田島の上毛婦人教育会結成などの活動と趣旨に全面的な賛意を表している。注目すべきは、親交が深いとされる島地と小田島と、小田島が設立した上毛婦人教育会規則に、

期せずして「淑徳」と淑徳に関連する幾多の表現が見られることである。

3. 島地黙雷の「窈窕の淑徳」と「女子文芸学舎」

小田島の上毛婦人教育会や聞声の尼衆教場が開校した1888年（明治19）は、「仏教主義女学校のピークであり、全国に10校ほどが開校した」（中西 2000：32）といわれ、仏教系女学校の創設が盛んな年であった。そのなかから「女子文芸学舎」と島地黙雷の女子教育を取り上げる。

「女子文芸学舎」は1888年（明治19）9月に、島地黙雷・八千代夫妻によって開校され、創立者・島地黙雷は女性の役割としての家政^{かせい}を重視した。家政は主に明治時代に用いられた用語で、家の尊卑・格式・地位・家柄などを表す熟語である。黙雷は教育目的に「本舎ハ専ラ良家ノ婦女ヲシテ家事ノ經理ニ必要ナル別紙課程表ノ学科ヲ教授ス」を掲げ、和服裁縫、洋服裁縫、編物、插花、点茶、和歌、英語、算術などの科目で学科編成をし、2年制であった。

教育目的に「淑徳」の言葉は見当たらないが、筆者が同校を取り上げた理由は、創立者・島地黙雷がいろいろな場面で「淑徳」「婉婉窈窕^{えんめんようちよう}の淑徳を養成^{しゆくとく}」などの表記を多用していることと、明治の女子教育における島地黙雷の影響力の大きさを検討する必要を考慮したからである。

たとえば、女子文芸学舎の創立に先立つ、上毛婦人教育会の『婦人教会雑誌』第7号（1888年8月）の「月報」に、「島地師の書簡^{ながとのかにのぼかん}」の見出しで、長門国馬関（現在の山口県下関）の教法寺・多田道然に宛てた7月20日付手紙が紹介されている。島地は、僧侶の多田道然の女学校創立構想に賛意を示し、「婦人教育の重点は決して男女同権などという、不都合なるお転婆にならないようにして、婉婉窈窕^{えんめんようちよう}の淑徳を養成^{しゆくとく}なさるようご注意下されたく…」（現代語訳）と綴っている。

島地黙雷の考えの背景には、島地自身の「僧侶による普通教育を推奨する提言」があった。小平美香は論考「機関紙『女子道』の発行をめぐって—山口県における近代女子教育と宗教—」で、「黙雷は政教分離の立場から、祭政一致の指導理念に基づいた国民教化のような公教育に宗教が関わることを退けたが、一方で『僧侶ハ速ニ普通教育ニ従事スベシ』として僧侶が普通教育を兼任すべきであることを主張している。まさに黙雷らの女子教育はこうした近代的な宗教思想のもとに行われたものであった」（小平 2015：26）と指摘している。

島地の教育論の原点にあるのは、洋行した日本で最初の僧侶の一人としての自負と、明治初期に先進のヨーロッパの宗教事情や教育事情を視察した貴重な実地体験である。岩倉使節団に遅れること2ヵ月、1872年（明治5）1月27日に横浜港を出発した真宗本願寺派の5名の俊秀^{うめがみたくゆう}、梅上沢融^{れんじよう}、島地黙雷^{もくらい}、赤松連城^{れんじよう}、堀川教阿^{きやうあ}、光田為然^{みつだ いぜん}には大きな使命が託されてい

た。島地黙雷にはキリスト教を中心とする宗教の視察と、先進国における教育の現状、なかでもキリスト教による教育の実態や参考にするべき点の視察が任務とされていた。

山口輝臣著『島地黙雷』では、「5人には役割分担があった。梅上沢融と黙雷の二人は『海外教状視察』。赤松連城と堀川教阿はイギリス留学、光田為然はドイツ留学。黙雷はさしずめ副団長といったところか。（略）留学生の渡航先からわかるように、一行の目的地はイギリスとドイツというヨーロッパ諸国だった。よって黙雷に課された『海外教状視察』の対象も、まずは欧州の状況となろう。黙雷たちは、キリスト教への敵愾心^{てきがいしん}を燃やしていたのだから、いうなればこれは敵状視察である」と記している（山口 2013：25～27）。さらに帰国後の黙雷の立場と行動の特長を、「黙雷にとって、キリスト教はつねに敵であるとともに、モデルであった」（山口 2013：92）と指摘している。

5名のうち、島地黙雷、赤松連城、光田為然の3名は長州（現在の山口県）出身で、特に島地は、岩倉使節団がアメリカを視察した後のヨーロッパ滞在中に、同郷の木戸孝允^{きどたかよし}（岩倉使節団の副団長）と親交を深めた。明治政府の中樞を担った木戸は、帰国後の島地の活躍を支持する強力な理解者となり、宗教や教育に関する島地の提言は明治政府に重用される結果となった。そうした視点に立つとき、島地が「僧侶ハ速ニ普通教育ニ従事スベシ」とした提言が仏教界に与えた影響は大きかったと言えよう。

前述したように、聞声は一般女子の普通教育の必要性を痛感して、1888年（明治21）に「奨学建議書」を浄土宗議会に提出している。さらに聞声の師・福田行誠と島地は、明治初期の神仏分離令や廃仏毀釈の嵐が吹き荒れたとき、共に仏教界の危機を救うべく立ち上がった代表的仏教者であり、旧知の間柄であったことも興味深い。島地は1906年（明治39）に、手塩にかけ育てあげた女子文芸学舎を真宗本願寺派に献納している。聞声が1903年（明治36）に淑徳高等女学校を浄土宗に寄付した行動と軌を一にするものである。その後、女子文芸学舎は1909年（明治42）に千代田高等学校に昇格している。現在の「千代田女学園」の前身である。

ここで重要なのは、これまでに確認できた関連資料の中でという限定付きであるが、「^{ようちよう しよくとく}窃窳の淑徳を養成」という表記の初出記録は、島地が1888年（明治21）7月20日付で多田道然に宛てた書簡と考えられることである。

4. 「積徳女学校」の「淑徳」

時系列をたどると、次に「淑徳」をかかげた女学校は、1888年（明治21）10月に真宗本願寺派築地別院の境内に開校した「積徳女学校」である。東京都立公文書館所蔵の同年9月25日付の「私立学校設立願」を見ると、「本校ハ速成ヲ旨トシ女子ニ適実ナル學術技芸ヲ教授シ本分ノ淑徳ヲ全クセシムルヲ以テ目的トス」として、「淑徳ヲ全クセシムル」を教育目的

にかかっている。添付の学科学期課程表や教科用書表等から、以下のことが読み取れる。

- (1) 学科は修身，読書，作文，英学，数学，歴史，裁縫，生理，衛生，経済，習字，音楽，体操で，予科は2年で，本科は3年で学ぶ。
- (2) 1年を3学期に分け，学期末に試験を実施する。
- (3) 入学生徒の年齢は満12歳以上とし，尋常小学校卒業の者およびこれに相当する学力を有するものに限る。
- (4) 学校の設置場所は，「京橋区築地三丁目十六番地本願寺境内」とする。
- (5) 名称は「積徳女学校」である。
- (6) 設立者は山本貫通。設立者履歴書等を見ると，山本貫通は愛媛県の出身で安政3年（1856）の生まれ。明治11年に宮城県小教校教授を勤め，明治16年より東京府の奇日新報の編輯に従事し，明治19年に本願寺派の教師となった。
- (7) 教科用書表には，読書の部，英学の部，数学の部，歴史の部の4部構成が示され，読書の部に下田歌子編輯『和文教科書』などが記載されている。
- (8) 岐阜県出身の川瀬絹，北海道根室出身の蛸子小二郎，新潟出身の前波善孝の教員履歴書も添付されている。

同校提出の「開業御届」（東京都立公文書館所蔵）を確認すると，東京府より同年10月3日に認可が下りたので22日より開業するとしている。中西は「女子文芸学舎が主に東京の『良家ノ婦女』を対象にしていたのに対し，本校は，地方の寺院出身者や信徒を入学させ，卒業後は地元で女教師として活躍する人材を育成しようというのが本旨であった。そのため，寄宿舎を設ける計画もあったが，わずか1年あまりで廃止されたようである」（中西2000：36）と解説している。たしかに『婦人教会雑誌』第10号（明治21.11.24）に，「積徳女学校寄宿生」の見出しで寄宿舎の建設を相談中で，完成までは創立委員10余名に入学した生徒を委託することが決定した，と掲載されている（『婦人教会雑誌』第10号，19頁）。

同校は1年ほどで廃校となり，どのような「淑徳ヲ全クセシムル」教育が行われ，どのような教育成果を残したかなど，詳細は不明である。

5. 「六和女学校」の「淑徳」

次に，「淑徳を涵養し，善良なる婦女を養成する」を教育目的にかかげる「六和女学校」が1888年（明治21）12月，北海道函館に開設された。翌月（1889年1月）発行の『反省会雑誌』第14号に，「今度該地各宗寺院会合の六和会，其会員の奮起にて，議決後一ヶ月を経て，六和女学校を設立し」と掲載されている。

六和会は函館の寺院で組織する六和講のことで，「称名寺（浄土宗），高龍寺（曹洞宗），真言寺（天台宗），実行寺（日蓮宗），常住寺（日蓮宗），西別院（真宗本願寺派），東別院

（真宗大谷派）の5宗派7ヶ寺であった」（函館大谷学園 1988：4）。六和女学校の校名はこの六和講に由来し、女学校の設立理由はキリスト教系女学校に対抗してのものであった。1901年（明治34）に真宗大谷派の単独経営となり、1902年に函館大谷女学校と改称し、1923年（大正12）に高等女学校となるなど発展の歴史をたどっている。現在の函館大谷学園の前身である。

開校当時の六和女学校の「創立の精神と教育方針」を、函館大谷学園『創立百年史』では、「その中心は『仏教精神』を基盤とする女子の教育であり、その目的とするところは、『女子に須要なる学術技芸を授け、淑徳を涵養し、善良なる婦女を養成するを以て目的とす』（創立40年記念号、「本校の歴史」）」（函館大谷学園 1988：7）と記録している。

6. 「淑徳」をかかげる女学校の存在

教育目的に「淑徳」「静淑の徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳の養成」をかかげる女学校を探した結果、^{ぎようくん}小野島行薫を中心とする上毛婦人教育会、山本貫通の積徳女学校、北海道函館の5宗派7ヶ寺で発足した六和女学校などを確認することができた。

もとより、聞声自身の確たる記載がないため、どの女学校を指して教育目的に「淑徳」をかかげる女学校としたのか不明である。筆者が確認した上記の女学校であった確証はない。さらに、「教育目的に淑徳をかかげる複数の女学校が、淑徳を達成できず、むしろ、教育目的と反対の教育結果が多かった」という聞声の疑問が、どの女学校を指していたのかも定かではない。

しかし、本稿の考察によって、聞声が設立趣意書Aを起草した時点で、「淑徳」を教育目的にかかげる女学校が少なくとも2校、そして聞声が設立した淑徳婦人会と同様に、会則に「淑徳の養成」をかかげる婦人会が存在していたことが明らかとなった。

7. 徳育重視の風潮と「淑徳」の校名

ここで視点を変えて、聞声の設立趣意書Aを詳細に読み込むとき、知育偏重の教育を正し、徳育重視の教育目的が見えてくる。知育よりも徳育を目指す教育理念の源流の一つが、伊沢修二の『教育学』であると、筆者は考える。

伊沢修二はアメリカ留学で教育学を学び、1878年（明治11）に帰国すると1882年（明治15）に『教育学』を出版している。「教育トハ何ソヤ、^{いわ}曰ク、完全ナル人物ヲ養成スルノ術ナリ」と説き起こし、「精神上ノ教育ハ、通常分テニトス。専ラ智心ノ教養ニ関スルモノヲ智育ト云ヒ、専ラ徳性ノ教養ニ関スルモノ、之ヲ徳育ト云ウ」（伊沢 1882：2）と解説し、「第3篇徳育」で多くの頁を用いて徳育論を展開している。

伊沢は『教育学』とともに『学校管理法』（1882年刊）を著している。両書は日本の教育

学における最初の本格的学術研究書であり、明治の教育界に大きな影響を与えた。聞声は設立趣意書Aで、「徳を身につけた教員を招き」「さらに教科書および学校運営の方法を充分吟味して、(女子生徒たちの)静淑の徳(道徳心)を養成する上で問題が起きないように努力する(覚悟である)」としている。徳武真有はこの表現について、「(この)誇り高き文章は、健やかな本校(筆者注、淑徳女学校)の教育方針を示す一節であるが、そのかげには伊沢氏の協力をしのばせるものがある」(徳武 1962: 17)と指摘している。筆者も同感である。

さらに伊沢修二は淑徳女学校の初期に孫娘を入学させ、夫人の伊沢千世子(千勢子)が淑徳婦人会の発起人に名を連ね、伊沢修二自身も淑徳婦人会が付帯事業として淑徳女学校内に開設した清韓語学講習所の顧問に就任するなど、聞声および淑徳女学校と密接な関係を持っている。聞声が設立趣意書Aを作成するうえで、伊沢修二の『教育学』に見られる徳育重視の考えと、『学校管理法』に示された具体的な方法論が大きく影響しているといえよう。

また、徳育を重視する風潮は、1890年(明治23)2月に山県有朋内相が召集した地方官会議で、「徳育涵養ノ義ニ付建議」が承認されたことで一気に高まったといえる。それは聞声が上京した翌年、設立趣意書Aを起草する前年である。麻尾陽子は、地方官会議に出席した知事の動向や、「徳育涵養ノ義ニ付建議」が議決された理由を詳細に分析し、賛成した知事のなかで、「初めて知事になった11人は徳育の現状を見て驚き、知事・県令経験のある13人は、徳育の衰退が以前にいた県だけではないことを実感して慌てたのではないだろうか」と評している(麻尾 2015: 574)。

地方官会議に出席した知事が「徳育の現状を見て驚き」「徳育の衰退」に慌てたのは、小・中学生が父兄を軽侮する心を起こすなど、⁸⁾ 西洋流の価値観に傾いている教育現場を見聞しての感想である。聞声が「皆、淑徳をかかげているが、往々にして目的と反対の教育結果が多い」と疑問を呈していることに通じるものである。聞声が校名と教育目的に用いた「淑徳」という言葉の背景には、この徳育教育の高まりが大きな意味を持っていたのである。

8. 日本初の近代的国語辞典と「淑徳」

次に、幕末から明治にかけて、新たな日本語が膨大に作られたことを考察する。^{にしあまね}西周(啓蒙思想家)や福沢諭吉などの教育者・哲学者・啓蒙家たちは、西欧各国に留学して西洋近代の思想や学問を学んだのち、日本に紹介するために、漢学の知識を生かしてわかりやすい翻訳語や新語の考案に尽力した。明治初期に洋行し、西洋の教育・宗教事情を視察した島地黙雷もその一人である。やがて体系的な翻訳語などの造語が進み、哲学、自由、社会、権利、国会、憲法、個人、近代、存在、恋愛など、新たな概念をあらわす諸分野の学術用語が作られた。⁹⁾

一方、1875年(明治8)から国語辞典の編纂が開始された。担当したのは当時の文部省報

告課に勤務していた大槻文彦である。国語辞典が近代国家の証として、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカなどでも盛んに編纂されていた。大槻文彦は39103語を収録した『言海』(全4冊)を1886年(明治19)に完成し、1891年(明治24)に出版を完結した。日本初の近代的国語辞典である。時を同じくして1889年(明治22)、^{こうかん}浩瀚な語彙数を収録した高橋五郎輯著『和漢雅俗いろは辞典』が刊行された。いずれも聞声が設立趣意書Aを提出する2年前の出版である。

ここで、「淑徳」に関連する言葉が明治初期の日本語を網羅した国語辞典に収録されているか否かを確認をする。結果は、「淑女……德行アル女」(『言海』)、「淑女……よきをんな(德行ある女)」(『和漢雅俗いろは辞典』)と「淑女」はあるが「淑徳」はない。収録されていない理由は、日本語としてまだ一般的でなかったためと考えられる。

辞典に収録された「淑女」の語源は、前述の「^{ようちようしよくじょ}窈窕淑女(窈窕たる淑女)」の四字熟語である。しかし、四字熟語に「^{ようちよう}窈窕淑徳(窈窕たる淑徳)」は見当たらない。では、「淑徳」や「^{ようちよう}窈窕たる淑徳」は、いったいどこから来たのであろうか。

ここで、島地が『婦人教育雑誌』第1号(1888年、明治21.5.1)に寄稿した「^{よく}能く日本人の細君となり得るや否や」を再検討してみる。黙雷は「およそ男子は必ず配偶者に淑女を得んことを望み、淑女も配偶者に才子を得んことを望む」と書き始め、雑誌『日本人』の発刊を一男児の誕生になぞらえ、一男児にふさわしい「日本婦人すなわち^{せいしよくようちようえんめんでいじゅう}清淑窈窕婉婉貞徒の^{いちかじん}一佳人」を求めると記している。島地の記述の根底に『詩経』の「たおやかで美しい女性は、君子の良き伴侶となる(窈窕淑女、^{こうきゆう}君子好逑)」があることは、容易に推測できる。さらに、3ヵ月後の7月20日付の多田道然宛の手紙に、「^{ようちよう しよくとく}窈窕の淑徳を養成なさるよう」とあることから、徳育教育の高まりを背景に島地などによって、四字熟語で慣用の「窈窕たる淑女」が「^{ようちよう しよくとく}窈窕の淑徳」と言い換えられ、続いて「^{ようちよう しよくとく}窈窕たる淑徳」となり、その意味が「淑徳」の二文字に集約され、女子の徳育教育を表す清新な言葉として用いられるようになったと考えられる。

ここで思い出すのは、日本になかった「哲学」という単語を明治初期に普及させ、新鮮な流行語にし、その概念を定着させたのが東京大学の哲学科誕生(1977年、明治10)であったことである。¹⁰⁾ 清新なイメージの「淑徳」を普及させ、女子の徳育教育を象徴する言葉に定着させたのは、淑徳女学校の開校と聞声の率先垂範の教育姿勢、^{し こん はかま き いっばん}紫紺の袴に生一本の白線を入れた淑徳女学生の清新な姿であったといえよう。

V. 考察

本稿では、淑徳女学校の校名であり、聞声の教育目的にかかげられた「淑徳」「^{ようちよう}窈窕たる淑徳」を、「淑徳女学校設立趣意書」を中心に論究した。その考察をまとめると以下の通り

である。

1. 1892年（明治25）4月15日の「静淑女学校創立並びに建築諸言（設立趣意書B）」で静淑女学校と校名が公表されたが、同年6月11日までに淑徳女学校と変更された。
2. 聞声が1891年（明治24）9月17日付で、浄土宗務所學監に提出した「普通女学校の設立願」が、「淑徳女学校設立趣意書」と表記されるようになるのは、1942年（昭和17）発行の広瀬了義編『淑徳女学校五十年史』からであることを確認した。
3. 「淑徳女学校設立趣意書」と「静淑女学校創立並びに建築諸言」は、相互補完する内容を持つことを考察した後、本稿では「淑徳女学校設立趣意書」を設立趣意書Aとし、「静淑女学校創立並びに建築諸言」を設立趣意書Bと表記することにした。設立趣意書Aの「現在、女学校と称するものが多数設立されている。その（教育）目的は、皆、淑徳をかがけているが、往々にして目的と反対の教育結果が多いのはどうしてであろうか」という聞声の疑問をもとに、「淑徳」を教育目的にかかげる女学校を探し、1888年（明治21）設立の積徳女学校と六和女学校を確認した。合わせて、聞声が淑徳女学校の開校翌年に設立した淑徳婦人会と同じように、会則に「淑徳の養成」をかかげる上毛婦人教育会（1888年、明治21）の存在を明らかにした。
4. 聞声の「淑徳」は徳育重視を象徴するもので、その背景に伊沢修二の『教育学』、島地等の普通女学校の推奨、1890年（明治23）2月の地方官会議での「徳育涵養ノ義ニ付建議」など、徳育が重視される時代風潮があったことを論究した。
5. 四字熟語に「^{ようちようしゆくじょ}窈窕淑女（窈窕たる淑女）」はあるが、「^{ようちよう}窈窕淑徳（^{ようちよう}窈窕たる淑徳）」は見当たらない。「窈窕の淑徳の養成」という表記の初出記録は、島地が1888年（明治21）7月20日付で多田道然に宛てた書簡であることを確認した。さらに、徳育教育の高まりを背景に島地などによって、四字熟語の「^{ようちようしゆくじょ}窈窕淑女（窈窕たる淑女）」が「^{ようちよう}窈窕の淑徳」と言い換えられ、続いて「^{ようちよう}窈窕たる淑徳」となり、その意味が「淑徳」の二文字に集約され、女子の徳育教育を表す清新な言葉として用いられるようになったことを論究した。一方、幕末から明治にかけて、新たな日本語が膨大に作られたことを考察し、日本初の近代的国語辞典である『言海』や、『和漢雅俗いろは辞典』に「淑徳」が収録されていないことを確認した。未収録の理由は、日本語としてまだ一般的でなかったためと考えられる。
6. 清新なイメージの「淑徳」を普及させ、女子の徳育教育を象徴する言葉に定着させたのは、淑徳女学校の開校と聞声の率先垂範の教育姿勢、紫紺の袴に生一本の白線を入れた淑徳女学生の清新な姿であったことを考察した。

注

- 1) 長谷川匡俊は、良信を「黎明期日本社会事業の先駆者」と表記している(長谷川 2020: 1)。
- 2) 古宇田亮修は「渡辺海旭と「マハヤナ学園」の命名」のなかで、命名の由来の解説とともに、近年の研究成果としてマハーヤーナは「大きな乗物」と「大きな智慧」という、二つの意味がこめられた一種の掛詞であったことを指摘している(古宇田 2019: 74)。
- 3) 長谷川よし子は1926年(大正15) 4月に尼衆学校に入学し、1931年(昭和6) 年3月の卒業式には総代として答辞を読んでいる(米村 2012: 54~57)。
- 4) 谷紀三郎編『聞声尼』は、聞声が東京本所の感応寺で病氣療養をしていたとき、姪の松田すて子が谷紀三郎に聞声の伝記執筆を依頼したものである。谷は何度も感応寺を訪問して、病床の聞声から聞き書きを繰り返し、聞声の愛弟子・平松誠厚や松田すて子が収集した関係資料をもとに執筆し、原稿を聞声の入寂3日前に完成。聞声没後2ヵ月後の1920年(大正9) 6月10日に発行した。非売品のため、ほとんど流布しなかったと考えられる(米村 2017: 143~144)。極端に資料の少ない聞声関連資料のなかで、貴重な資料である。
- 5) 「浄土教報」は、浄土教報社から1889年(明治22) ~1944年(昭和19) まで発行された逐次刊行物である。浄土宗を中心に当時の世相や仏教の各宗派・宗教界の出来事を克明に記録し、近代日本の浄土宗の歴史や社会・宗教の動向を知るうえでの基本資料である。
- 6) 聞声は1888年(明治21) 2月に「尼衆教場」を開校した後、一般女子の教育の必要性を訴え浄土宗議会に「奨学建議書」を提出した(広瀬 1942: 3)。
- 7) 広瀬了義の略歴については、広瀬了義編『淑徳七十年史』参照(広瀬 1962: 162)。
- 8) 麻尾陽子「教育勅語起草の契機—明治二三年の地方官による建議—」(麻尾 2015: 574)。
- 9) 木村秀司『身近な漢語をめぐる』(大修館書店, 2018年)、飛田良文『明治生まれの日本語』(淡交社, 2002年)、柳父章『翻訳語成立事情』(岩波書店, 1998)等を参照。
- 10) 飛田良文『明治生まれの日本語』211-219頁参照。

参考文献

- 函館大谷学園記念誌編集部会 1988年 『創立百周年誌』函館大谷学園。
- 長谷川匡俊 2020年 『長谷川良信の生涯』淑徳選書7, 長谷川仏教文化研究所。
- 長谷川良信 2014年 「社会事業とは何ぞや」『長谷川良信全集』第1巻, 日本図書センター。
- 広瀬了義 1942年 広瀬了義編『淑徳五十年史』淑徳高等女学校。
- 同 1962年 広瀬了義編『淑徳七十年史』学校法人大乗淑徳学園。
- 伊沢修二 1882年 『教育学』森重遠, 丸善商社書店。
- 小平美香 2015年 「機関紙『女子道』の発行をめぐる—山口県における近代女子教育と宗教—」『学習院女子大学紀要』第17号, 学習院女子大学。
- 古宇田亮修 2019年 「渡辺海旭と「マハヤナ学園」の命名」『社会福祉法人マハヤナ学園100年史』社会福祉法人マハヤナ学園。
- 久木幸男 2010年 久木幸男編『仏教教育の展開』仏教教育選集2, 国書刊行会。
- 麻尾陽子 2015年 「教育勅語起草の契機—明治二三年の地方官による建議—」『法学新報』121巻, 法学新報編集委員会。
- 中西直樹 2000年 『日本近代の仏教女子教育』法蔵館。
- 芹川博通 2005年 『国家・教育と仏教—現代を生きるための指針—』北樹出版。
- 淑徳大学自校教育研究会 2018年 『淑徳学入門 ~建学の精神を学ぶ~』淑徳大学。
- 淑徳大学自校教育推進委員会 2019年 『淑徳大学 自校教育ガイドブック』淑徳大学。
- 谷紀三郎 1920年 谷紀三郎編『聞声尼』私家版。
- 徳武真有 1962年 徳武真有編『淑徳教育七十年』学校法人淑徳学園。
- 山口輝臣 2013年 『島地黙雷』日本史リブレット人088, 山川出版。
- 米村美奈 2012年 『長谷川よし子の生涯』淑徳選書2, 長谷川仏教文化研究所。
- 同 2109年 『輪島聞声の生涯』淑徳選書6, 長谷川仏教文化研究所。

A Discussion on the Meaning of the name “*Shukutoku*” in the Founding Prospectus of *Shukutoku Jogakkō*, (Shukutoku Girls’ High School)

YONEMURA, Mina

“Gakkōuhōujin daijō shukutokugakuen”, which is based on “Shukutoku University”, has the historically background that was established through a merger with “Shukutoku Jogakkō” had established by Wajima Monjo who was the pioneer in girls’ education and “Daijō jiosigakuen” had established by Hasegawa Ryousin.

The school was named “Shukutoku” taken over shukutoku jogakkō after the merge. Because the school name is a symbol of the founding philosophy.

A funder puts his/her founding philosophy into the school name and the name tells important education objectives as an educational institution.

Deeply understanding about the founding philosophy equivalent understand the education objectives.

In this paper, I would like to discuss the naming process and the educational meaning of “Shukutoku”.